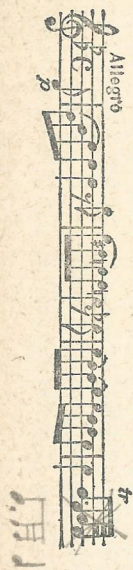


るが、彼のペンは音符の代りに、ヴォルテエルだとか水菓子だとかと書かねばならず、従ってその効果については、彼は何事も知らない。郵便屋は、確かに手紙を父親の許まで届けたが、彼の不思議な愛情の徴^{しるし}が、一緒に届けられたかどうかは、甚だ疑わしい。恐らくそんなものは誰の手にも届くまい。空に上り、鳥にでもなるより他はなかつたかも知れぬ。ただ、モーツァルト自身は、届いた事を堅く信じていた事だけが確かである。僕には、彼の裸で孤独な魂が見える様だ。それは、人生の無常迅速よりいつも少しばかり無常迅速でなければならなかつたとも言いたげな形をしている。母親を看病しながら、彼の素早い感性は、母親の屍臭^{しかう}を嗅いで悩んだであろう。彼の悩みにとっては、母親の死は遅く来すぎたであろうし、又、来てみれば、それはあまり単純すぎたものだったかも知れぬ。彼は泣く。しかし人々が泣き始める頃には彼は笑っている。

スタンダルは、モーツァルトの音楽の根柢^{こんてい}は *tristesse* (かなしさ) というものだ、と言った。定義としてはうまくないが、無論定義ではない。正直な耳にはよくわかる感じである。浪漫派音楽が *tristesse* を濫用して以来、スタンダールの言葉は忘れられた。*tristesse* を味う為^{ため}に涙を流す必要がある人々には、モーツァルトの *tristesse* は縁がない様である。それは、凡そ次の様な音を立てる、アレグロで。(ト短調クインテット、K. 516.)



ゲオンがこれを *tristesse allante* と呼んでいるのを、読んで時、僕は自分の感じを一言で言われた様に思^{おも}ひ驚^{おどろ}いた。(Henri Ghéon, *Promenades avec Mozart*) 確かに、モーツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に玩弄^{あそび}する^はは美しすぎる。空の青さや海の匂いの様に、万葉の歌人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉の様^{よう}にかなしい。こんなアレグロを書いた音楽家は、モーツァルトの後にも先にもない。まるで歌声の様に、低音部のない彼の短い生涯を駆け抜ける。彼はあせってもいなし急いでもない。彼の足どりは正確で健康である。彼は手ぶらで、裸で、余計な重荷を引摺^{ひきず}っていないだけだ。彼は悲しんではない。ただ孤独なだけだ。孤独は、至極^{しごく}当り前^{あたりのまへ}な、ありのままの命であり、でっつけられた孤独に伴う嘲笑や皮肉の影さえない。

モーツァルトの音楽の深さと彼の手紙の浅薄さとの異様な対照を説明しようとして、——彼は人に自分の心の奥底は決して覗かせなかつた、又、そういう相手にも生涯出会わなかつた、父親に対する敬愛の情も、どこまで本気なのか知れたものではない、とどのつまり、結婚事件では、見事に父親は背負^{せお}い投げをくっているではないか、その最愛の妻にも、愚かな冗談口しかきいていないではないか、つまるところ彼は、自分の芸術に関する強い自負と結び付いた人生への軽蔑の念を、人知れず秘めていたのではあるまいか、——そういう風な見方をする評家も少ない様である。

しかし、僕はそういう見方を好まぬ。そういう尤もらしい観察には何か弱々しい趣味が混入している様に思われる。十九世紀文学が、十分に注入した毒に当^{あた}った告白病者、反省病者、心理解